

高齢者の生きがいと地域づくり ～長崎県江迎町における「元気えむかい」の取り組み～

菅原良子・藤崎亮一・内山憲介

Making a life worth living for senior citizens as community development
- Approach of "Genki Emukai" in Nagasaki Prefecture Emukai-cho -

Yoshiko Sugawara · Ryoichi Fujisaki · Kensuke Uchiyama

キーワード

地域づくり 高齢者 有機農法 生きがい
長崎県江迎町

要 旨

近年注目されている「住民参加型の地域づくり」について、過疎地での地域づくりの担い手として高齢者に注目し、長崎県江迎町において有機農法による野菜づくりに取り組んでいる「元気えむかい」の活動を事例に、高齢者による地域づくりのあり方、その意義と特徴について検討をおこなった。

住民主体の地域づくりが求められる中、特に過疎地ではその担い手として高齢者が重要になること、老後の生活の安定、さらには地域経済の活性化のためには年金プラス α のいくらかの収入が得ることが可能な活動を行うことが重要であること、具体的な活動を行う中で自分たちの活動の意義を位置づけなおす意識の醸成がみられることを明らかにした。

はじめに

近年注目されている「まちづくり」「地域づくり」は、その経過をみると1960年代の高度経済成長期における行政主導によるハード中心の都市計画から、1970年代の国によるコミュニティ政策の流れを経て、近年ではソフト中心の住民参加型へとそのあり方が変わってきている⁽¹⁾。他方、国や自治体の財政状況は悪化し市町村合併が進む中、自治体は広域化しこれまでの行政サービスが行き届かなくなる地域が出てくることも懸念されている。このような状況を考えると、今後は地域住民が協働して行政に頼らずに地域のことを考え地域の活動に主体的に取り組んでいくこと、住民主体の地域づくりがますます求められている状況にあるといえよう。

しかしながら過疎地では若者は地域を離れ、高齢化がすすんでいる。そのような地域では、地域づくりの担い手として自ずと高齢者の役割が大きくなるように思われる。また、高齢化が大きな問題とされる中、いかに介護を必要としない元気な高齢者を増やすかは大きな課題である。

その意味では精神的にも時間的にもある程度の余裕がある高齢者の活力を活かす地域づくりについて考えることは重要な意義があると思われる。

本稿では、地域づくりの担い手としての高齢者に注目し、有機農法による野菜づくりに取り組んでいる長崎県江迎町の「元気えむかい」の活動を事例として、高齢者による地域づくりのあり方について考察していく。

1. 高齢者と地域づくり

日本の高齢化率は2004（平成16）年において19.5%となっており、急速に高齢化が進んでいる。他方少子化も進んでおり、2004年の合計特殊出生率は1.29とされている。少子高齢化が進む中、日本の人口が、統計を取り始めた1899年以来、はじめて出生数が死亡数を下回る「自然減」に転じたことを昨年末に新聞各紙が報じたことは記憶に新しい⁽²⁾。

「人口減少社会」の到来といわれる中、労働力人口の減少、社会保障の給付減や負担増などが問題になっている。また、国の財政難が深刻化する中、地域の自立が求められ、地方分権、市町村合併が進行する中で、1990年代以降、住民参加型の地域づくりが展開されつつある。

このような社会状況の中で、知識と経験を備え、退職後の時間的にも精神的にも余裕がある元気な高齢者が地域づくりに関わることは大きな意義があると思われる。

大雑把な概算になるが、2004年2月末現在の介護保険制度の第1号保険者（65歳以上の者）

* Received February 23, 2006

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 地域づくり学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

数は、全国で2,443万人、そのうち要介護認定者数は379万人となっており⁽³⁾、第1号保険者の約16%である。つまり、残りの約85%、約2,064万人の多くは、まだまだ元気な高齢者ということになる。『厚生労働白書』（平成17年版）は、日本の高齢者が諸外国と比べて就労意欲が高いことを指摘し、「高い就労意欲を有する高年齢者が長年培ってきた知識と経験を活かし、意欲と能力のある限り、年齢に関わりなく働き続けることができる社会の実現に向けた環境整備を行うことが必要である」⁽⁴⁾としているが、この指摘は地域づくりにおいても当てはまるであろう。

しかしながら『厚生労働白書』でも指摘されているように、老齢基礎年金の支給開始年齢の引き上げが段階的に行われながらも、65歳まで働ける場を確保している企業は7割、原則として希望者全員が65歳まで働ける企業は3割と高齢者を取り巻く雇用環境は厳しい状況にある。また、国家財政が悪化している中で年金の給付額減少への不安も広がっている。

このような社会状況の中、高齢者が退職後の活動の場として地域でいきいきと活動を行い、それが「コミュニティビジネス」として成り立てばいくらかの収入も得られることになり、ひいてはそのことにより地域が活性化することにもなる。

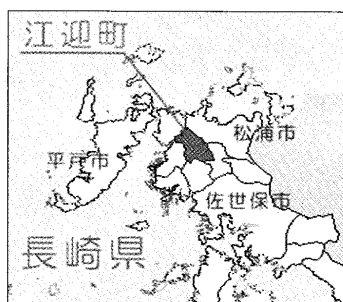
本稿では、以上のような意図のもとで、長崎県江迎町において、江迎町役場と長崎ウエスレヤン大学の教員が関わり、高齢者を中心とした地域住民が有機農法による野菜づくりに取り組んでいる「元氣えむかい」の活動を事例としながら、高齢者が地域づくりに関わる意義について考察する。

2. 「元氣えむかい」の発足と活動の経過

①江迎町の概要

江迎町は長崎県の北部、北松浦郡のほぼ中央にあり、佐世保市の北に位置している（下図参照）。

昭和初期から石炭で栄え、戦後も石炭の町として飛躍し、人口も1920（大正9）年に行われた第



（江迎町HPより）

1回国勢調査では4,706人であったのが1940（昭和15）年には一万人を超え、1955（昭和30）年には18,032人と急増した⁽⁵⁾。しかし1950年代後半から、主要なエネ

ルギーが石炭から石油へと転換していく中で炭鉱の閉山が相次ぎ、1967（昭和42）年には最後の炭鉱が閉山した。炭鉱の閉山以降は、企業誘致や観光開発などが行われたものの苦戦を強いられ、農業が主な産業となっており、過疎化が進行している。主要農産物としては、米、肉用牛、生乳、葉たばこ、イチゴ、ハウスミカン、ハウスビワがあげられ、近年ではグリーンツーリズムの一環としてオーナー制度を取り入れた黒大豆づくりにも取り組んでいる。また、生活改善グループによりだんご類などの加工品も作られているなど、様々な取り組みがなされているが、農家における後継者不足は大きな課題となっている。

炭鉱閉山以降、人口も減少の一途たどり、2003（平成15）年においては6,094人（男2,838人、女3,256人）となっている。高齢者の状況を見ると、65歳以上の人口は1,625人で、高齢化率は27%であり、全国平均の19%より上回っている状況である。しかし、65歳人口のうち介護保険制度の認定者は1,625人の約20%、325人であり、それに入院患者を加えても430人に過ぎず、残りの1,195人は元気な高齢者ということになる⁽⁶⁾。

以上のような江迎町の状況を踏まえ、高齢者を中心とした地域活性化のための取り組みが何かできないかと考え、江迎町役場と大学が協議を始めたのが2003年3月のことであった。

以下、「元氣えむかい」発足までの経過と発足後の活動の歩みについて述べる。

②発足までの経過

そもそも上述した江迎町役場との協議は、筆者の一人である本学の内山憲介教授が昔から江迎町と関わりをもっており、炭鉱閉山後、人口が減少し高齢化が進み、厳しい状況にたたされている中山間地域である江迎町において、地域住民を主体とした地域活性化のための活動が何かできないかということ、役場に呼びかけたことから始まった。特に高度経済成長以降、中央主導による中央依存型経済システムにより日本経済は成り立ってきたが、不況によりその経済システムが停滞し、国の構造改革により地方財政が圧迫し、市町村合併により都市部とその周辺地域の格差の危機が不安視される中で、今後は行政に頼るのではなく地域住民を主体とした地域経済を活性化できるような取り組み、つまり「コミュニティビジネス」につながるような何らかの取り組みが必要なのは

ないかという問題提起であった。

特に年金給付減少の不安が広がる中、その減少を補えるプラスαの収入を得られる何らかの取り組みを高齢者中心にできないか、そしてその取り組みを厳しい状況に直面している江迎町の地域活性化の取り組みとして位置づけていこうということを提起した。

そしてそのためには行政が主導して行うものではなく、地域住民自らが自分たちが住んでいる「まち」の地域資源を見直し、あるいは新たに発見し、地域活性化のためにはどのような活動が必要かを考え、地域住民自らが活動に取り組んでいくものにする必要がある。まずは江迎町の地域資源に関する調査研究と「コミュニティビジネス」の可能性についての検討を、住民とともにおこなう「場」を役場の協力を得ながらつくっていこうということになった。

内山教授の他、筆者である本学の教員2名、藤崎助手・菅原講師が加わり、2003年3月以降、約1年半にわたって江迎町役場との協議を持ち、その間、江迎町役場から町民へ呼びかけてもらい2004（平成16）年7月には「江迎町民の潜在力調査開発に関する取り組み事前説明会」、11月には「江迎町民の潜在力調査開発に関する研究協議会」を開催し、町民に理解と協力を呼びかけるとともに、この提起に対しての様々な意見を出してもらった。そこでは、具体的にどのような活動をおこなっていくのかや、大学の役割についての質問、これまで江迎町で町民が取り組んできた活動（活性化塾など）を活かした活動をしてほしいという要望、黒大豆づくりや景観作物づくりといった町民の活動紹介がなされた。

役場との協議、2回の町民に対する説明会をふまえ、まずは江迎町全世帯を対象としたまちづくり活動に関する住民意識調査を江迎町役場と大学が共同で行うことと、江迎町民を主体とした有機農法による野菜づくりの活動を行っていこうということになった⁽⁷⁾。

野菜づくりの活動はもともと内山教授の「坪畑農業構想」に端を発し、高齢者が本格的に農業を行うのは難しいが、市民農園的に1人1坪程度の土地で野菜を作り、それを数十名で行えば共同で出荷ができるという構想に基づくものであった。また野菜に付加価値をつけるためには、近年、食への関心が高まっており、有機農法による無農薬の野菜づくりが適しているのではないかと、そして江迎町の基幹産業が農業であることを考えると、

農業による地域活性化の取り組みが良いだろうという考えからであった。また、近くに有機農業のかたわら「生ゴミリサイクル」のリーダーの育成を行っている「大地といのちの会」代表の吉田俊道氏に農業指導をお願いできるという環境にあったことも、この活動をすすめていく条件に適していた。

その後「有機農法による野菜づくり」への参加を町民に呼びかけるため、2005（平成17）年5月17日に江迎町役場にて「元気野菜づくり、有機農法説明会」を実施した。説明会には約20名の町民が参加し、説明会後には、活動への参加の意思を表明した9名の町民が集まり今後の活動予定や組織体制について話し合った。

以上が発足までの経過である。次に発足後の経過について述べる。

③活動の経過

以上のような経過を踏まえ、2005（平成17）年5月30日に約10名の農業を本業としない定年退職者、主婦などが集まり「元気えむかい」の設立総会を開催し、会則の検討や、代表・副代表・会計といった役員を選任、会費（1世帯3,000円）などを決めた。

会則によれば、会の目的は以下のようになっている。

- (1) 安全安心して食べられる有機農法による元気野菜作りの研究と普及。
- (2) 高齢者等の健康、生活の向上のための元気野菜づくりを推進する。
- (3) 元気野菜づくりを通じて町外転出者等に郷土の香りを贈る活動
- (4) その他、目的達成のために必要な事業を行う。

以上4点を会の目的とし、会の活動が始まった。

また、同日、吉田氏の指導の元、3年以上耕作されていない遊休農地の雑草を刈り、刈った雑草のすきこみ、耕運作業を行ったのを始め、6月には米ぬかと油かすにより微生物を増殖させた「ぼかし」肥料づくりや肥料まきを行い、その後人参、ごぼうなどの種まきを行い、秋の収穫までこぎつけた。それまでの詳しい活動経過を表1にまとめた。

日にち	活 動 内 容
2005年	
5月30日	「元氣えむかい」設立総会、会則の検討、役員を選任、会費の決定 遊休農地での草刈、すきこみ、耕耘作業の実施
6月13日	ぼかし肥料づくり講習会
6月27日	ぼかし肥料まき、耕運 (この間10日に1回耕運作業)
7月25日	種まき前の肥料(ぼかし肥料、有機石灰)まき
8月8日	人参、ごぼうの種まき (これ以降毎週月曜日、木曜日に会員全員で草取り、間引き作業)
10月5日	江迎町・長崎ウエスレヤン大学共催「食と農を考え健康で元気な街づくり」講演会開催 時期をずらし、人参、ほうれん草、みずな、ブロッコリーの種まきを実施
10月	人参の収穫作業開始
12月	ごぼうの収穫作業開始
12月11日	2005食育祭(長崎ブリックホール)にて野菜販売

(2005年12月11日「食育祭」での配布資料『「元氣えむかい」の活動紹介』をもとに作成)

農作業の活動の他にも、表1にあるように10月5日には江迎町と本学共催で「食と農を考え健康で元気な街づくり」講演会を開催した。その内容は、本学の内山憲介教授による問題提起「食育基本法とまちの活性化について」、吉田氏を講師として「いのちいただきます 地球にやさしい安心安全なげんきやさいづくりを」と題した特別講演からなるもので、最後に「元氣えむかい」の活動の紹介を行い、参加者を募るというものであった。

また、人参とごぼうを収穫した後は、佐世保のデパートの有機野菜を取り扱っているコーナーに出荷し、また12月5日には長崎の環をつなぐ食育祭実行委員会主催により行われ、2000名以上が参加した「長崎の環をつなぐ食育祭」(長崎ブリックホールにて開催)にて、長崎県内の各地から集まった他の生産者と同様に「元氣えむかい」もブースを設け、自分たちでつくった人参や人参ジュースの販売を行った。「食育祭」に来た人々に試食してもらいながら販売を行ったが、「甘い」「おいしい」との評判で、あっという間に人参は売り切れた。

以上が発足から現在までの「元氣えむかい」の活動経過である。現在の会員数は約20名ほどであり、設立当初の頃より増えている。自分のペースで活動にすることを基本としているため、緩やかな組織形態となっている。

会員を中心に、大学が関わり、役場の協力も得ながら活動を進めてきた約1年であった。

3. 会員を対象としたアンケート調査の結果から

2005年10月末に「元氣えむかい」の会員を対象として、アンケート調査を行った。

アンケート調査の概要は以下の通りである。

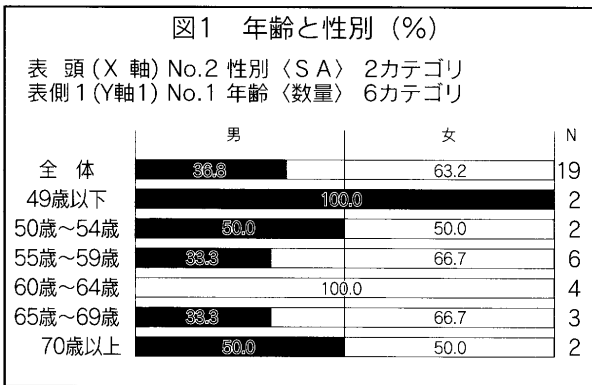
①アンケート調査の概要

- (1) 調査対象者 「元氣えむかい」の会員
 - (2) 調査方法 アンケート調査用紙を、直接会員に配布し、無記名自己記入の後、郵送により回収を行った。
 - (3) 回収数 19票
 - (4) アンケート項目の概要
 - I. 年齢(数字記入)・性別(選択回答)
 - II. 職業(選択回答)
 - III. 「有機農法」の説明会への出席有無(選択回答)
 - IV. IIIの説明会を知ったきっかけ(選択回答)
 - V. 「元氣えむかい」への参加時期(選択回答)
 - VI. 「元氣えむかい」を知ったきっかけ
(途中参加者に対してのみ、選択回答)
 - VII. 「元氣えむかい」に参加後の変化の有無(選択回答)
 - VIII. 参加前後の体調の変化(複数選択回答)
 - IX. 参加前後の心の持ち方の変化(複数選択回答)
 - X. 参加前後の食べ物への関心の変化(複数選択回答)
 - XI. 「元氣えむかい」の将来像(自由記述)
- 以上がアンケート項目の概要である。以下項目の順に調査結果をまとめた。

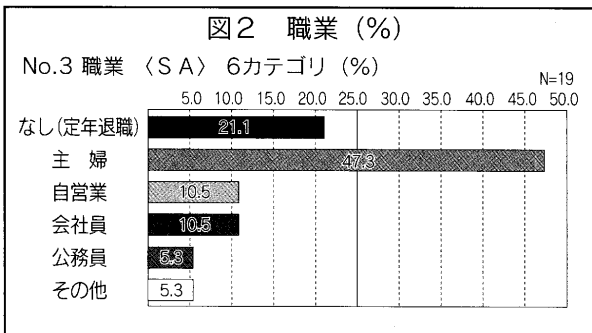
②アンケート調査結果

(1) 回答者の属性

回答者 19 名中、女性が 12 名 (63.2%)、男性が 7 名 (36.8%) であり、女性が 3 分の 2 を占めている。また、50 歳代が 8 名、60 歳代が 7 名と 50 歳代～60 歳代が主力を占めている (図 1)。



また、職業については、主婦 9 名 (47.3%)、定年退職者 4 名 (21.1%) となっている (図 2)。

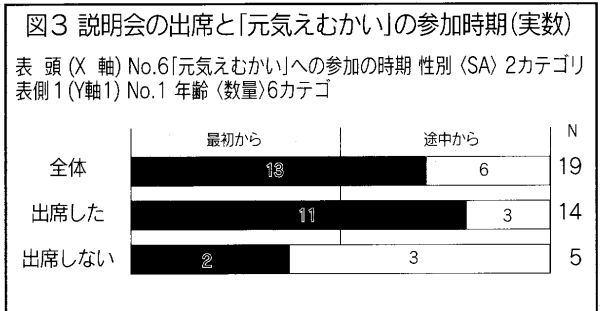


(2) 「元氣えむかい」への参加のきっかけ

2005 年 5 月 17 日に江迎町役場でおこなわれた「元氣野菜づくり、有機農法栽培説明会」への出席者が、19 名の回答者のうち 14 名 (73.7%) を占めており、この説明会が「元氣えむかい」への参加の直接のきっかけとなっていることがうかがわれる。また、「説明会をどのように知ったか」については、「町からの回覧文書」が 10 名 (52.6%)、「友人などから聞いて」が 7 名 (36.8%) となっており、行政からの文書と知人が情報源となっている。

そして、この説明会に参加した 14 名の内、11 名 (57.9%) が「元氣えむかい」設立時から関わり、その後残りの 3 名 (15.8%) が他の会員に誘われて途中から加わっている。説明会に出席していない 5 名 (26.3%) の内、2 名 (10.5%) が「元氣えむかい」設立時から、3 名 (15.8%) は途中から参加しているが、5 名とも会員からの誘いで「元氣えむかい」に参加するようになった (図 3)。

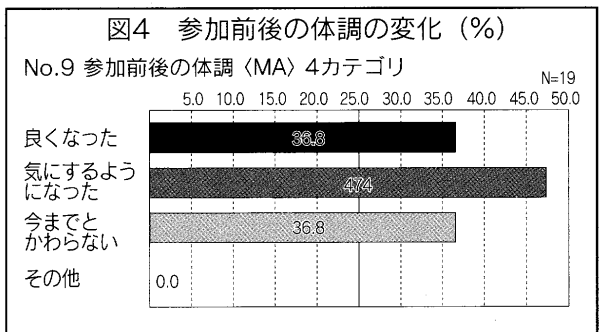
この点からすると、会員の増加には「口コミ」が大きく影響していることがわかる。



(3) 「元氣えむかい」参加後の変化

アンケートでは 3 点にわたって、「元氣えむかい」の活動に参加してからの変化について尋ねた (複数回答)。一点目は体調の変化、二点目は心の持ち方、三点目は食べ物に関心についてである。その結果を図 4～6 に示した。

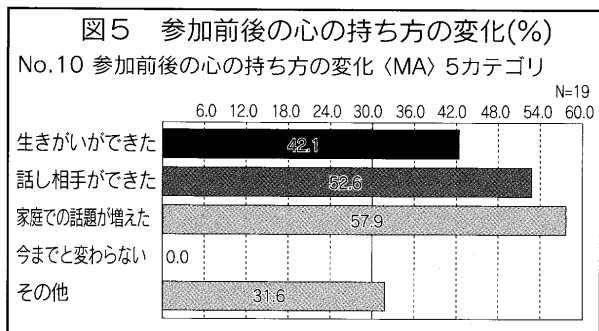
まず、「参加前後の体調の変化」についてだが、図 4 に示すように「元氣えむかい」の活動に参加するようになり、「体調が良くなった」と回答した人が 7 名 (36.8%)、「体調を気にするようになった」と回答した人が 9 名 (47.4%) であった。約半数の人が、体調が良くなる、あるいは気にかけるようになったことが分かる。



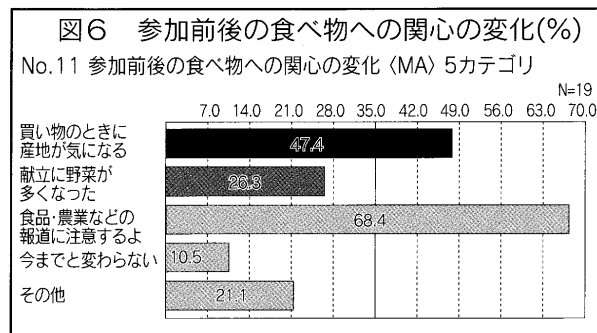
また、「参加以前と現在の心の持ち方などの変化」については、図 5 に示すように、最も多かった回答が「家庭での話題が増えた」(11 名・57.9%) であり、次に多かった回答は「話し相手ができる」(10 名・52.6%)、3 番目に多かったのは「生きがい」(8 名・42.1%) であった。その他として「知らなかった方と友達になれた」というように仲間ができたことへの喜びや、「農業の勉強ができた」「食の安全、食の健康、有機農法について関心が高まった」「食に対する関心が強くなった」というように、農業や食に関して興味・関心を持つようになったことがあげられている。

また、「今までと変わらない」という回答が無かったことは注目すべき点であり、「元氣えむかい」

い」の活動がこれまでの生活や気持ちの持ち方にプラスの影響を与えていることがわかる。



「食べ物への関心」については、19名中13名(68.4%)が「新聞やテレビの食品・農業などの報道に注意するようになった」と回答しており、最も多くなっている。次に「買い物のときに産地が気になる」(9名・47.4%)、「献立に野菜が多くなった」(5名・26.3%)となっている。その他では「無除草剤の表記に気をつけるようになった」「野菜を粗末にしなくなった」「家庭生ゴミの肥料化、家庭園作りへの実践が一步深まった」「野菜そのものの味を味わいたいと思うようになった」といった回答があげられており、野菜づくりを通して野菜そのものへの関心から、農業や産地表記といった食品の安全性、ごみ問題といった環境問題に関心が広がっていることがわかる。



(4)「元氣えむかい」の将来像

アンケートでは、最後にそれぞれが思い描く「元氣えむかい」の将来像について、自由記述で記入をしてもらい15名の方に回答いただいた。その内容を表1にまとめた。

この回答では、「畑をいろいろな野菜でいっぱいにしたい」、「江迎の特産物にしたらいい」、「食と農への関心が広がればいい」「仲良く楽しく活動を続けていく」「つくった野菜を給食に利用する」「親子をまきこんだ活動をしたい」といった今後の活動への希望や広がりや期待するとともに、活動を「地域づくり」の一環として位置づけ、江迎町を「生ごみを土に戻しゴミを出さない環境の良い町」「健康の町」「野菜づくりを通してつながりをつくる」「親子子供たちが生き生きとした」地域にしたいという自分たちが目指すべき地域像が出されている。

また今後の課題として、特定の会員に負担がかからないように仲間を増やすことや、活動のP.R.の不足、野菜を販売するためにマーケティングを考えていく必要性も指摘されている。

1	人参畑の後は色々な野菜でいっぱいになりたい。個人の区画には何を植えるか考え中。会員同士が競い合って元氣な野菜を作り、市場での評価をもらって頑張りたい。
2	地域全体に、高齢者が無農薬野菜にこだわり生産していくという輪が広がる様になればと思う。野菜生ごみを土に戻して、その土を利用して(生ごみを可燃ごみに出さない)町づくりをした。労働力はいるが、お金のかからない、環境の良い町、健康の町を目指したい。 また高齢者が生産したものを若い人に食べてもらい、食物の事、食事の事、郷土料理等を伝えたい。本当の味、本物の町、元氣高齢者の町が夢。
3	活動についてもっとP.R.が必要。また、マーケティングについて考えていくことが大切。
4	皆と一緒に作業できることが楽しくてたまらない。仲間の輪がどんどん広がって、農薬一杯の野菜を出荷している人たちが少しでも減って、すばらしい食品が出来るようになると思う。
5	みんなが元氣で仲良く、そして商業ペースにまでなれば幸せ。エンジンの町、江迎にしたい。
6	会員が楽しく耕作している姿が想像できる。
7	とても楽しく野菜作りに参加させてもらっている。もっと多くの人が無農薬野菜に関心を持たれて参加されるといいと思う。ゆくゆくは学校の給食の材料になったり学校で野菜作りがなされたりして、子供達も野菜作りに参加したり、親や子供達が生き生きとしたら、町も活気付くと思う。

8	会員数をもっともっと増えて行って欲しい。数多くの健康な野菜を作り地域の皆様にも喜んで欲しい。
9	畑にいろいろの野菜があり無農薬で安全な野菜を求めている人に届くように出来たらよいと思う。
10	野菜作りの実践ができたら良いと思い参加した。 今はまだスタートしたばかりで素人がお互いに協力して野菜を作っているような状態だが、今後もっと専門的に多種の野菜が作れるようになり定着できれば良いと思う。 畑の広さに対して現在のところ労力が少ないので、一人一人の負担が重くならなければ良いと思う。今のところ感動を味わっている方が多いが、これが長くなると楽しみや感動以外の重荷にならないようお互いに声をかけあい、長く続けるよう努力していかないといけないのではないかと思う。 これからも楽しく勉強していきたい。よろしく願いいたします。
11	老若男女、共に野菜作りという活動を通して、つながりが出来ればと思う。 そのために使用が可能であれば、都市で行われている休耕田・農地を活かした家庭菜園への募集、そしてそのサポートが「元氣えむかひの会」メンバーでできるようになれば良い。 この過程での交流を通して地域の人の交流、結びつきを深め、強くする一助になればと思う。 老若男女が共にパワーを分かち合える、町づくりを作るきっかけになる会になればと思う。
12	野菜を販売し、その結果 ・食への関心を地域の人々に持っていただく。 ・金額の多少にかかわらず、農作業により報酬があることで自分の存在を認めることができる。 ・協同で作業をすることにより、互助の心ができていく。 ・社会参加ができる。 江迎（元氣えむかひの会）から、他市町へ食への発信を行う。
13	まだ何とも分からないが、私なりに一生懸命頑張りたいと思う。今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。
14	入会した始めは、健康づくりにと思った。野菜を育てながらとてもいとおしく思った。こんなすてきなおいしい野菜を、「えむかえ」の名物元氣野菜として、特産物にしていったら励みにもなるし、すばらしい事じゃないかと思う。
15	より多くの元氣老人の参加を得て、食と農についての理解がひろがればよい。

おわりに

～「元氣えむかひ」の活動の特徴と意義～

以上、高齢者が地域づくりに関わる意義と長崎県江迎町における「元氣えむかひ」の活動についてみてきた。

アンケートでは、活動に参加後、会員にいくつかの変化があったことが明らかになった。その内容としては、体調が良くなったり、体調を気にするようになったこと、また家庭での話題が増えたり、話し相手や仲間が増えたりなど人間関係の充実、野菜や食品の安全性、ごみ問題などに対して関心が深まったという点があげられる。その意味では「元氣えむかひ」の活動は一定の成果があったといえよう。

以下、「元氣えむかひ」の活動の特徴と意義、今後の課題を述べることによりまとめに替える。

活動の特徴と意義としては、五点あげられるよ

うに思う。まず一点目は、野菜という「モノ」を育てる活動であるということである。自分が体を動かし、土地を耕し、種を植え、その野菜が育っていく、日に日に成長していく野菜をみる喜び、自分が育てたものがお客さんにおいしいと言ってもらい喜んでもらえるなど、自分たちの活動の意義が目に見えやすい活動であるといえよう。

また二点目として、やることははっきりとした具体的な活動であるということがあげられる。「地域づくり」「まちづくり」というと、まず自分たちの地域を活性化するためには何が必要かという話し合いが先に来て、その後具体的な取り組み内容を決めていく。その話し合いの過程において、なかなか合意形成ができず、話し合いだけで終わってしまったり、具体的な取り組み内容を決めてもそれに反対する人がいたりしてなかなか進まなかったりすることもある。もちろん話し合いや勉強会も重要であるが、「元氣えむかひ」の場合、

役場と大学が協議を行う中であらかじめの活動内容を決め、その活動の趣旨に賛同した住民が関わっている。そのため、楽しみながら和気あいあいと活動をすることができている。

三点目としては、一、二点目と関わってくるが、ボランティアとしての地域づくり活動ではなく、いくらかでも収入を得ることを目指した活動であるということである。年金だけでは老後の生活が安心して送れない社会状況の中で、高齢者にとっては年金プラス α の収入が得られるということは重要になってくる。現在の収益は種代や活動費になっているが、今後はいかに収益を増やせるかが課題であろう。

四点目としては、活動が自分たちの活動の意義を意識化していくプロセスになっていることである。アンケートの自由記述にもあったように、活動をする中で自分たちの活動の意義を意識化し、あるいは再認識し、そこから自分たちの活動の意味を単に野菜をつくるということだけでなく、自分たちの活動を通して地域をどのようにしていきたいかという思いが出てきており、自分たちの活動を地域づくりの一環としてとらえなおしている。これは有機農法による無農薬野菜づくりという活動から、自分の問題意識が生まれ、考え、講演会などに参加する中で自分たちの活動の意義を再認識した結果だと思われる。具体的な活動が意識の変化、意識の醸成をもたらしたといえるであろう。

最後五点目として、地域住民を主体とした活動でありながら、役場の協力を得、大学が関わった三者の連携により、活動が行われていることである。今回は大学が江迎町での地域づくり活動を提案し、役場とともに内容や段取りを考え、住民へのよびかけは役場が行い、具体的な活動開始後はあくまでも住民が中心となり行ってきた。三者が連携しながら、活動をすすめてきたところに特徴があるといえよう。

今後の課題としては、アンケートの中にもあったように特定の会員に負担が偏らないよう会員を増やすことと、1年目としては野菜づくりという目の前の活動に取り組んできたが、さらに自分たちの活動の意味を地域づくりの一環としての活動として再認識し、江迎町をどのような地域にしていきたいのか、そのために自分たちは今後どんな活動をしていくのか、年金プラス α の収入を得るため野菜の販売収益をあげるためにはどんな方策があるかなどの勉強会もあわせて行っていくこと

が考えられる。会員の興味・関心を広げ、自分たちの活動の意義を再確認しながら活動を行っていかねば、活動は尻すぼみになっていってしまうであろう。あくまでも活動は地域住民が主体になりながら、その活動に行政と大学がどのように関わり、支えていくか、その点が今後の課題であるといえる。

【註】

- (1) このような指摘は数多くなされている。例えば、斉藤進「まちづくりと市民」（倉沢進・小林良二『改訂版地方自治政策Ⅱ 自治体・住民・地域社会』放送大学教育振興会、2004年）。
- (2) 例えば、「毎日新聞」（2005年12月22日、朝刊）他。
- (3) 厚生労働省介護制度改革本部「介護保険制度の見直しについて」のパンフレットより。
- (4) 『厚生労働白書』（平成17年版）pp.245。
- (5) 以下、江迎町の概要については『江迎町総合計画』（平成12年8月）、江迎町郷土誌編集委員会編『江迎町郷土誌』（江迎町教育委員会、平成12年）を参照した。
- (6) 「江迎町における高齢社会活性化事業の概要」（本学内山憲介教授作成資料）より。
- (7) 住民意識調査については、大学がアンケート調査項目を作成し、役場と検討のうえ、2005（平成17）年8月に江迎町民に対し全世帯調査を実施した。現在、その結果を集計・分析中である。

付記：

本研究は本学地域総合研究所の公募研究2004年度K1の研究助成に基づく研究成果である。